

宮良長包の音楽教育活動に関する研究 (5) —作品研究Ⅱ (昭和前期篇) —*

大山伸子**

Abstract

筆者の先行研究、「宮良長包の音楽教育活動に関する研究 (4) —作品研究Ⅰ (明治・大正篇)—」⁽¹⁾ においては、長包が明治、大正時代に作曲した49曲のうち、旋律が明らかになっている34曲の声楽曲、校歌、団体歌について、作品ごとに解題を行ない、作品研究の第一作目とした。

「明治・大正篇」作品の音楽的特徴として、①明治期の作品は単旋律や習作が多いが、大正期になるとピアノ伴奏が加えられ、音使いが豊かになり、ポリフォニー音楽として充実してくる ②沖縄、八重山民謡をモチーフにして作曲する作品が多くなる ③自作の旋律モチーフを複数の自由に転用する作曲技法が見られる ④混合拍子の曲が多い、などが明らかになった。

本研究は、その後続研究として昭和期作品を扱い、昭和元年から昭和6年までを前期、昭和7年から長包が没した昭和14年までを後期として2期に区分し、本論文においては、昭和元年から6年にかけて作曲された40曲について、「昭和前期篇」とする。昭和前期の作品を時系列に整理し作品表を作成、その内、現在までに旋律が明らかになっている34曲について、作品ごとに解題を行なう。

さらに、筆者が『宮良長包作曲全集』を刊行した際の発掘作品の内容にも言及しながら、長包の昭和前期の作品研究を通して、長包の教育論、音楽論について論述する。

本研究の眼目は、戦火で一旦は消失した長包作品に1曲でも多く光を当て、解題を行なうことにより、長包の作品がより明らかになることを目指すものである。

I. 作品研究

「作品研究Ⅱ」は、昭和元年～6年に作曲された作品40曲を「昭和前期篇」とし、(1) 声楽曲、(2) 校歌、(3) 団体歌について時系列に分類、整理し、旋律が判明している34作品を【宮良長包作品表Ⅲ】に、旋律不明の6作品を【宮良長包作品表Ⅳ】に表記し、作品表にまとめた。

さらに、旋律が判明している34曲について、作品の曲名、作曲年 (または発表年、推定年)、作曲年齢、作詞者名、曲の音楽的特徴、作品に関連する事項を作品ごとに解題し、長包作品をより明らかにすることを、本論文の眼目とした。

また、『宮良長包作曲全集』⁽²⁾ (以下、『作曲全集』という) に収録した作業過程や、埋もれた作品の発掘研究にも言及することとする。

尚、作品解題は、『作曲全集』所収の楽譜に基づいており【本論文巻末表】、各々の曲番号は、「宮良長包作品表Ⅲ」と一致させている。曲名には、その作品の特徴やエピソードを副題に付した。

*A Study of Choho Miyara's Work in Music Education (5)

—An Interpretation of Works II (First Half of the Showa Era)—

**Nobuko Oyama

I-1. 昭和前期篇

(1) 声楽曲

1. 鷺の鳥 …祝宴の歌…

昭和2 (1927) 年に作曲 (44歳)、作詞者は泉国夕照。曲は、4/4拍子のアウフタクトで始まり、17小節の曲である。八重山民謡の「鷺の鳥節」の主旋律を、「鷺の鳥」に活用、長包は四重唱で作曲している。民謡の「鷺の鳥節」は、八重山の風習で、祝宴の座開き (幕開け) に必ず踊る演目で (踊り手は主催者側)、「元旦の朝に鷺が東天に飛翔するめでたさを歌った節歌」⁽³⁾ であり、めでたい席で踊りと共に演じる厳かで典雅な曲である。長包は、この「鷺の鳥」を四重唱に作曲した他に、音楽の教材として、三線の工工四譜と五線譜、それに歌詞を併記した総譜を表わしている⁽⁴⁾。また、長包の研究論文では、「(略)然らば沖縄音楽譜とも称すべき工工四なるものは果して如何。固より旧世紀の形見として古物として珍重せらるるも、決して新沖縄の現代楽譜として物足らぬ心地す。(中略)歌曲の高低、長短、強弱、緩急等の記譜なく、従てこれを学ばんとするや、必ず師匠の許に至り、いわゆる直感教授を受け、永久の時日を投じ、殆ど専門的研究せざれば、その技術の発達を望むべからず」、「宜なる哉、音楽は世界の普通語なりと。然るに沖縄楽譜工工四は、沖縄の小天地にのみ活用せらるるものにして、一步踏み出して他の楽界に到らんか」⁽⁵⁾ と述べ、工工四譜のみに固執する楽譜を痛烈に批判し、沖縄音楽の工工四譜を五線譜化する必要性について力説している。

2. ちゅんちゅん雀 …第一号作曲輯に収録…

昭和2 (1927) 年に作曲 (44歳)、作詞者は新垣隆正。曲は、二長調、2/4拍子、25小節の曲で1番のみである。前奏部や後奏部に16分音符を使い、雀のすばしっこさや、また、チュンチュクと泣く箇所にも16分音符を使い、雀の愛らしさを表現している。出だしのE音と終止音のE音は、主音のD音を敢えて使わない音使いが特徴的である。この作品は、2005年6月、野々村孝男氏の調査により、長包自身が編集した存命中の作曲集第一号、『南島唱歌第一輯』⁽⁶⁾ が東京藝術大学附属図書館に所蔵されていることが判明した。それは、宮良長包の最初の作曲集であり、9曲が収められている。以前より、宮良長包研究家の三木健が『童謡集』としてその存在を認めていたが、詳しいことがわからなかった。しかし、この楽譜の出現で、「ちゅんちゅん雀」は、78年振りにその姿を現した。

『南島唱歌第一輯』には、「月夜の鷗」、「月」、「旅心」、「あきずすいすい」、「牛」⁽⁷⁾、「えんどうの花」⁽⁸⁾、「緋色の小袋」⁽⁹⁾、そして「ちゅんちゅん雀」⁽¹⁰⁾ の8曲が長包の作曲作品として収められており、他、八重山のわらべ歌、「ほういてふが」が1曲収録されている。

3. 月夜の鷗 …混合拍子で童謡風…

昭和2 (1927) 年に作曲 (44歳)、作詞は新垣隆正。前出の「ちゅんちゅん雀」と同様、『南島唱歌第一輯』に収録されている曲である。曲は、アウフタクトで始まる16小節の曲で、歌詞は2番までである。3/4拍子で始まるが、15~16小節で4/4拍子に変化する混合拍子である。調は、1~8小節まで変イ長調であるが、9~12小節で臨時記号のC^bとF^bで変化をつけ変イ短調に転調し、再び13~16小節で変イ長調に戻っている。3連符が特徴的で童謡風である。

4. 月 …長包には少ない転調曲…

昭和2 (1927) 年に作曲 (44歳)、作詞者は不明。『南島唱歌第一輯』に収められている。曲は、4/4拍子で16小節であるが、調は出だし変ホ長調で始まり、9～12小節は変ホ短調、13～16小節で再び変ホ長調に転調する。長包の作風には、少ない転調曲である。歌は4番まであり、3連符を主体にした手法は、「月夜の鷗」や「旅心」にスタイルが似ている。

5. 旅心 …「へちまの棚」の本タイトル…

【楽譜1】 (1～20小節目)

へちまの棚

金城 栄治 作詞 歌唱 当間典子・宮城美智子
宮良 長包 作曲 録音・採譜 大山伸子

1. へちまの たーな の うーすあ か り
2. む ね に はーいよ る さーびし か さ は

つ き は お ぼろ に て りう ど う
つ きよ の せーい か た めい き か

こ ころ は さーみ し あ きち か み
お さな き いーも の す すり な き

は さま の さーと の うーすあ か り
お ぼ ろ つ きよ の さーびし か は

こーよ い ねーざめ の たーびご こ ろ
おーとな き みーよ の うーすあ か

録音: 当真典子 (2003/3/11) 宮城美智子 (2003/4)

【写真1】 (東京藝術大学附属図書館所蔵)

旅 心

こころはさーみしあきちかみ
おさなきいーものすすりなき

へちまのたのうすあかり
月はおほろに照らさむ
心はさびしげちかみ
問の里の河津に
今宵ねざめの旅心
胸にはひよるさびしきは
月夜の棚のためいきが
愛しき妹のすすりなき
おぼろ月夜の旅心
うすあかり

金城 栄治 作詞

昭和2 (1927) 年に作曲 (44歳)、作詞者は金城栄治。「へちまの棚」の旋律は、記憶を辿って歌ってくれた那覇市在住の当間典子さんと、名護市在住の宮城美智子さんの歌唱を採譜し楽譜化したものである。

その時点では、曲名も旋律さえも全く知られていなかった埋もれていた曲であった。

その採譜を手掛かりに厳密な精査を行なった結果、長包作品と断定し、「へちまの棚」の曲名で新発掘作品として、2003年発刊の『作曲全集』に収録したものである【楽譜1】。

その後、前述のとおり、2005年6月に野々村孝男氏の調査により、『南島唱歌第一輯』の存在が確認された。その中には「旅心」が収められており、「へちまの棚」は、それと同一の曲であることが、判明したのである。【写真1】

『作曲全集』には「へちまの棚」の曲名で掲載したのだが、『南島唱歌第一輯』に掲載されている「旅心」と比較すると、旋律が若干異なっている箇所はあるが、3連符やリズム構成はほぼ同じで、「へちまの棚」は「旅心」であることが立証された。

そして、「旅心」の楽譜の出現で、①曲名は「へちまの棚」ではなく「旅心」であること、②旋律は若干異なる箇所があるが、同一の曲であることがわかった。同時に、発掘作品として位置付けた「へちまの棚」は、まぎれもなく長包の作品であることが、立証されたのだった。

そして、人間が歌う記憶力の正確さを改めて実感することとなったが、『作曲全集』発刊時に、長包作品と断定した筆者の判断が正しかったことも証明され、正直なところ、安堵感を覚えたのである。

6. あきずすいすい …沖縄方言でとんぼの呼称…

昭和2(1927)年に作曲(44歳)、作詞者は新垣隆正。曲は、4/4拍子、16小節で歌詞は1番のみである。調は、1～5小節はト長調、6～12小節はト短調、13～16小節はト長調に転調している。主調はト長調であるが、同主調のト短調に転調し、再びト長調に戻っている典型的なABA形式である。「あきずすいすい」とは、沖縄の方言(アーケージャー)でとんぼの呼称であり、15小節目の《おりゃがさとも》で一旦、フェルマータでD音を延ばし、16小節目で《寄とくれ》と終結しているが、このフェルマータはとんぼが止まる様子を見事に表わしている。

7. 駅路(うまやじ) …馬車に揺られる様子を表出…

昭和3(1928)年に作曲(45歳)、作詞者は泉国夕照。この曲は、ヘ長調、6/8拍子、30小節の曲で、二重唱で構成され、ピアノ伴奏で作曲されている。出だしのF音からC音へ上行する飛躍が動きを醸し出し、歌と歌の間に(ラララララ)を挿入、4分音符と8分音符のスイングリズムの組み合わせと、9拍遅れのカノンが、馬車に揺られる様子や馬車から見える光景を描写しており、イメージが豊かに広がる。

8. 春小雨 …音階的旋律に気品…

昭和3(1928)年に作曲(45歳)、作詞者は泉国夕照。この曲は、変ホ長調、33小節で歌詞は3番までである。拍子は、1～3小節は4/4拍子、4～5小節は3/4拍子、6小節のみ2/4拍子、7～31小節は3/4拍子、32小節のみ4/4拍子で、33小節の3/4拍子で終止する。歌の出だしの上行形と下行形の音階的旋律が前半部と後半部の旋律モチーフで繰り返され、気品を醸し出している。

長包は、独唱とピアノ伴奏で作曲しているが、「生誕120年宮良長包コンサート」⁽¹¹⁾では、初めてオーケストラとソプラノ独唱に編曲され⁽¹²⁾、長包作品が新しい表現スタイルで演奏された。泉国夕照とのコンビでは、「稲刈歌」、「コイナユンタ」、「だんじゅ嘉利吉」など9曲あり、琉球民謡を元歌にした重唱曲が多いが、この作品は長包独自の創作旋律である。

9. オランダ屋敷 …「朝鮮の印象」の特徴的リズム活用…

昭和3(1928)年に作曲(45歳)、作詞者は松山晴児。松山晴児について詳細は不明である。曲は、ト長調、4/4拍子、22小節で歌詞は4番まであり、ピアノ伴奏で作曲している。

長包の同僚で音楽教師の備瀬知範は、「ヒントをつかむのが極めて巧みで、編曲の技術は、実に妙を得ていた」⁽¹³⁾と述べ、長包が民謡を元歌に、巧みに編曲する長包の作曲手法を賞賛している。また、備瀬は、「いつか武井守成の高級なマンドリン合奏で朝鮮の民謡を主題にした曲を聴いてもらったところ、その中に《タタッタタッタ》という特殊なリズムが伴奏部に出てきて二人はいたく心をひかれたが、次の日曜日に早速自作の中にそのリズムをうまく生かしてあった」⁽¹⁴⁾と述べている。

そこで、①朝鮮の民謡を主題にした曲とは何か、②特殊なリズムを生かした自作の曲とは何かについて調べてみた。その結果、朝鮮民謡の「朝鮮の印象」⁽¹⁵⁾という曲のリズムに《タタッ

【楽譜2】 (9~16小節目)

1. オラ ン ダ や しー きー と ふ る あ め は て
 2. オラ ン ダ や しー きー と な が ー つ い たい
 3. ひ と り ー ご も り ー の あ き な さ れ
 4. オラ ン ダ や しー きー に お と ー ず れ

タタタタタタタタ
 ┌12小節┐

さ めー ざ め さ んー ざー の な みー だ あ め
 まー ー ど の あ かー りー の み えー も せ ぬ し
 お くー に ー お もー ー て な きー わ び ぐ
 わ かー ば ー む せー びー の ゆー ま し れ

タタタタタタタ
 ┌16小節┐

タタタタタ》があり、そのリズムに酷似した、「オランダ屋敷」の伴奏部、《タタタタタタタタ》のリズムを取り入れた12小節と16小節の箇所がある⁽¹⁶⁾【楽譜2】。備瀬のいう、「長包はそのリズムを自作にうまく生かしていた」というのは、「朝鮮の印象」にあるリズムの《タタタタタタタ》を、「オランダ屋敷」の伴奏部《タタタタタタタタ》に活用したのではないかと筆者は解釈している。

曲名の由来は、那覇市安里にメソジスト宣教師・ヘンリー・シュワルツ夫妻が居住していた屋敷があり、「オランダ屋」と呼ばれていたことが、曲名の由来のようだ。

曲名の由来は、那覇市安里にメ

10. 首里古城 …装飾音符の妙…

【楽譜3】 (1~16小節目)

1. しゅり こじょうー の か たー ほ とー り との
 2. げにさみしきはこじょうー の あー り との
 3. せいごぼれてしゅりーじょうー ー
 4. あーついでをまきさーで れー

げっこうおーぼーろーに か げ ーろえ ばて
 おおーいしーがーきーは こ け ーむ へて
 とーぼーそーおちたーる や ぶ ーれ やし
 おもいーでーもーかなし しゅり ーの しろ

昭和3(1928)年に作曲(45歳)、作詞者は伊波南哲(詩人)。伊波は、長包が登野城尋常高等学校の教員時代の教え子である。伊波は、崩壊寸前だった当時の首里城を詠み、長包は、アルペジオやトリルの装飾音、フェルマータを駆使し、古城の佇まいを緻密な音使いで描写している。【楽譜3】

曲は40小節で、1~11小節はホ長調、12~19小節はホ短調、20~40小節で再びホ長調になって転調している。拍子は、1~3小節が4/4拍子、4~7小節は3/4拍子、8~16小節は4/4拍子、17~27小節は3/4拍子、28~31小節は4/4拍子、32小節のみ2/4拍子、33~34小節は4/4拍子、そして、35~38小節は3/4拍子、39~40小節で4/4拍子になり、拍子は目まぐるしく変化、長包が好んで作曲する混合拍子の手法が顕著に表われている。長包は、歌とピアノ伴奏で作曲しているが、

2003年の「宮良長包生誕120年コンサート」において、オーケストラ編成で演奏され⁽¹⁷⁾、豊かな音の響きが長包音楽の魅力を一層引き立てた。不朽の名作といわれ、芸術性の高い作品である。

11. 船路 …久米島が題材…

昭和3 (1928) 年に作曲 (45歳)、作詞者は宮里静湖。曲は、変ホ長調で歌詞は2番まであり27小節、ピアノ伴奏で作曲している。拍子は1~16小節2/4拍子、17小節のみ4/4拍子、18~27小節は再び2/4拍子になる混合拍子である。宮里静湖は沖縄県久米島出身で、長包とのコンビ作品は、「桑の実」、「荒磯の歌」、「久米島小唄」(楽譜不明)があり、宮里の詞は、久米島の自然を歌ったものや、久米島を題材にした作品が多い。

12. 夕立 …16分音符が夕立を表出…

昭和3 (1928) 年に作曲 (45歳)、作詞者は新屋敷幸繁。曲は、イ短調、24小節で歌詞は3番まであり、ピアノ伴奏で作曲している。拍子は、1~11小節が2/4拍子、12小節のみ5/8拍子、13~15小節は2/4拍子、16~20小節は3/8拍子、そして、21~24小節で2/4拍子に変化し、4拍子系と8拍子系が混在している混合拍子である。長包が好んで作曲する手法で、混合拍子は多くの作品に見られる。前奏の1~5小節は、16分音符を主体に急に強く降る夕立の様がリアルに表現されている。

13. 帰り舟 …囃子が癒し効果…

昭和3 (1928) 年に作曲 (45歳)、作詞者は宮良高夫。曲は、変イ長調で17小節、拍子は、1~5小節まで4/4拍子、6小節のみ2/4拍子、7~8小節は4/4拍子、9小節のみ2/4拍子、10~12小節は4/4拍子、13小節のみ2/4拍子、14~17小節で4/4拍子と頻りに拍子に変化し、1小節のみのために拍子を変えるという、長包の混合拍子へのこだわりが見られる。

帰島する帰り舟を情景描写したもので、曲中の6小節の囃子《アイヨ》、《ポップ》が、夕暮れ時の情景や人々の安堵感など心情を表わしている。長包は、楽譜上、速度を表示することはほとんどないが、この曲には、最初は、「ゆるく」、途中の10小節から、「速く」というテンポの指示がある。

14. 日暮れ …擬似音が日暮れ時を表出…

【楽譜4】 (4~10小節目)

4小節目

上行形

擬似音

ほ ろ ろ ほ ろ ろ と ほ ろ ろ ひ が く
 か ら ら こ ろ ろ と ほ ろ ろ ろ に く
 ら ん ら ん ら と ほ ろ ろ つ き が

9小節目

れーる - ホラ ひが く れーる
 れーる - ホラ ろに く れーる
 でーる - ホラ つき が でーる

昭和4 (1929) 年に作曲 (46歳)、作詞者は宮良高夫。曲は、変ホ長調で10小節の曲である。拍子は、アウフタクトで始まり、1~2小節は4/4拍子、3小節のみ5/4拍子、4~10小節は4/4拍子で、短い曲だが混合拍子で構成されている。1番は「からす」、2番は「白帆」、3番は「よいこ」を登場させ、4~6小節目の各々に、《ほろろほろろ》、《かららころろ》、《らんらんらん》の擬似音をG~B^b~C~E^b~F~E^b~Fの上行形音階を生かしながら、《ホ

ラ》の箇所を、C音～B^b音で下行させ、また、9小節目の終止音E^bに向って下行形を活用し、日暮れ時の心恹しい様子を表現している。歌詞は3番までである。【楽譜4】

15. 汗水節 (あしみじぶし) …沖縄民謡と誤解されている名曲…

昭和4 (1929) 年に作曲 (46歳)、作詞者は仲本稔。曲は、24小節で拍子は2/4拍子で、歌詞は6番までである。歌詞と五線譜 (三線用) の2段譜で、『作曲全集』に収録した。昭和3年、昭和天皇御即位記念に沖縄県学務課が募集した「貯蓄奨励民謡」に、当時、具志頭村の郵便局に勤務していた仲本の詞が当選し、その詞に長包が曲を付けた。歌意は、勤勉に働く大切さ、学問の大切さ、社会に奉仕する大切さを歌った教訓歌である。「安里屋ユンタ」も同様だが、人々に親しまれ愛唱されている曲であり、琉球民謡と誤解されるほど民謡に同化し、作曲者が宮良長包であることは、あまり知られていない。

また、『琉球賛美歌』には、「勤労歌」という曲名で収録され、歌われている。⁽¹⁸⁾

16. コイナユンタ …アカペラの二重唱歌曲…

【楽譜5】 (1～11小節目)

1. あかと ん ーぼー む ーれ と ーぶー コーホイナ
 2. わかな つ ーにー さ ーち も ーてー コーホイナ

1. ユイサ ユイサ ユイヤサ ユイヤサ ユイヤサヌサ また
 2. ユイサ ユイサ ユイヤサ ユイヤサ ユイヤサヌサ また

7小節目
 コイナ どーりーうー たーうーよ コーホイナ 囃子
 ほがら かーにーうー たーうーよ コーホイナ

コーホイナ
 コーホイナ

3. なごや ーかーに うーた うーよー コーホイナ

11小節目
 また コーホイナ 囃子

こだま しーてー ひーびくーよ コーホイナ

ユイサ ユイサ ひびくよ コーホイナ

昭和4 (1929) 年に作曲 (46歳)、作詞者は泉国夕照。二長調で、21小節の曲、歌詞は5番までである。拍子は、1～6小節は4/4拍子、7小節のみ3/4拍子、8～10小節は4/4拍子、11小節のみ3/4拍子、12～17小節は4/4拍子、18小節目は3/4拍子、19～21小節は4/4拍子に変わる混合拍子である。

沖縄民謡の「コイナユンタ」を元歌に、長包はアカペラの二重唱に作曲したが、7小節目、11小節目、18小節目の3/4拍子に変化する箇所、《ホイナ》、《コーホイナ》の囃子が歌と歌を繋いで効果を出している。

【楽譜5】

17. 廣野の涯 (こうやのはてであるいは、はたて) …高弟の作曲が先?…

昭和5 (1930) 年に作曲 (47歳)、作詞者は宮良高司。6/4拍子、24小節の曲で歌詞は1番のみである。調は、1～8小節はへ長調、9～16小節がへ短調、D.C.で再び1～8小節 (17～24小節) でへ長調に戻っている。同じ曲名で長包の高弟、糸洲長良も作曲しているが、聞くとところによると、糸洲が自作の「廣野の涯」を長包に見てもらったところ、長包が駄作と酷評、自身の曲を手本にするようにと作曲したのがこの「廣野の涯」の旋律だという。その真偽は、これまで調査していないが、今後、精査する予定である。

宮 良 長 包 作 品 表 Ⅲ
(昭和前期篇)

【旋律が判明している作品】

No	曲名	作曲・発表年(推定含む)	年齢	作詞者	作曲集・論文
1	鷺の鳥	昭和2 (1927) 年	44	泉国夕照	1927『沖縄教育』
2	ちゅんちゅん雀	昭和2 (1927) 年	44	新垣隆正	161号に「小学校唱歌科の本質的要義」発表
3	月夜の鷗	昭和2 (1927) 年	44	新垣隆正	
4	月	昭和2 (1927) 年	44	不明	
5	旅心	昭和2 (1927) 年	44	金城栄治	
6	あきずすいすい	昭和2 (1927) 年	44	新垣隆正	1927作曲集『南島唱歌第一輯』共益商社書店より発(9曲)
7	駅路	昭和3 (1928) 年	45	泉国夕照	
8	春小雨	昭和3 (1928) 年	45	泉国夕照	
9	オランダ屋敷	昭和3 (1928) 年	45	松山晴児	
10	首里古城	昭和3 (1928) 年	45	伊波南哲	
11	船路	昭和3 (1928) 年	45	宮里静湖	1927楽譜ピース「綾雲」を共益商社書店より発行
12	夕立	昭和3 (1928) 年	45	新屋敷幸繁	
13	帰り舟	昭和3 (1928) 年	45	宮良高夫	
14	日暮れ	昭和4 (1929) 年	46	宮良高夫	
15	汗水節	昭和4 (1929) 年	46	仲本 稔	1928宮良當壮・宮良長包共著『八重山古謡第一輯』郷土研究社より出版(八重山民謡採譜12曲収録)
16	コイナユンタ	昭和4 (1929) 年	46	泉国夕照	
17	廣野の涯	昭和5 (1930) 年	47	宮良高司	
18	猫ユンタ	昭和5 (1930) 年	47	宮良長包	
19	稲刈歌	昭和5 (1930) 年	47	泉国夕照	
20	だんじゅ嘉利吉	昭和5 (1930) 年	47	泉国夕照	
21	琉球木遣歌	昭和5 (1930) 年	47	新屋敷幸繁	1930宮良當壮・宮良長包共著『八重山古謡第二輯』郷土研究社より出版(八重山民謡採譜19曲収録)
22	なんた浜	昭和5 (1930) 年	47	宮良高夫	
23	夜雨	昭和6 (1931) 年	48	大浜孫佑	
24	迷い鳥	昭和6 (1931) 年	48	宮良高夫	
25	山の子守唄	昭和6 (1931) 年	48	宮良高司	
26	読谷村立古堅小学校	昭和2 (1927) 年	44	松根星舟	
27	うるま市立与勝中学校	昭和3 (1928) 年?	45	新屋敷幸繁	
28	沖縄県立第二中学校	昭和3 (1928) 年	45	二中国語科教員	
29	沖縄県立第三中学校	昭和3 (1928) 年	45	新屋敷幸繁	
30	名護市立名護小学校	昭和4 (1929) 年	46	名嘉元精一	
31	具志川尋常高等小学校	昭和5 (1930) 年?	47	古波蔵保昌	
32	沖縄縣師範学校附属小学校	昭和6 (1931) 年	48	福重猛治	
33	那覇市市民歌	昭和4 (1929) 年	46	安藤佳翠	
34	沖縄縣青年團歌	昭和5 (1930) 年	47	名嘉元浪村	

注1. 26～32【校歌】26、27、30は現在も歌われている

注2. 33～34【団体歌】33は現在も歌われている

18. 猫 (マヤ) ユンタ …コミカルさに味わい…

昭和5 (1930) 年に作曲 (47歳)、作詞者も宮良長包。曲は、へ長調、2/4拍子、21小節の曲で、同声三部唱で作曲、歌詞は4番までである。出だしと、8～10小節の《ねこがこをうんだ》の部分にカノンを取り入れ、《またミャウミャウ》の猫の泣き声や後半の囃子《ヒョーホーザーラーヨ》の三部唱のハーモニーは絶妙である。

与那国民謡の「与那国の猫小 (マヤグワー)」が題材で、長包はその主旋律を活用し、三部合唱曲に作曲した。出だしの歌詞、《与那国のマヤグワー (猫) は、エンチュ (鼠) 騙しのマヤグワー》は、与那国の役人の妾同士の仲の悪さを風刺した曲だが、長包は、コミカルにユーモラスに、猫と鼠の追っかけをカノン形式で作曲している。いしがき児童合唱団が⁽¹⁹⁾、得意とするレパートリーで、演奏会では常時、演目に取り入れている。詞の内容は大人向けだが、曲の軽快さと明るさは、子ども達が歌うとコミカルで、長包の妙味が発揮される。

これは猫と鼠を擬人化した作品だが、大正4-7 (1915-8) 年に作曲された、「すみれ」(作詞：新垣菊子) にも、《花》と《人》を擬人化した愛らしい曲がある。

19. 稲刈歌 …テンポの緩急が魅力…

昭和5 (1930) 年に作曲 (47歳)、作詞者は泉国夕照。八重山民謡の「黒島口説」の主旋律を用いて、二重唱に作曲した作品である。曲は、45小節、歌詞は3番までである。拍子は、1～12小節は4/4拍子、13～45小節は2/4拍子である。元歌の八重山民謡「黒島口説」は、豊作を祝う様子、網引きの様子、舟を漕ぐ様子などが描写されているが、「稲刈歌」は、最初ゆったりとしたテンポで始まり、中間部《イヤーイヤー》の囃子で2/4拍子の変化と共に、テンポアップし、速度の緩急を生かした作曲手法である。映画『えんどうの花』では⁽²⁰⁾、イントロの場面で、稲を刈っている情景描写の映像と共に女性合唱団が歌い⁽²¹⁾、映画を存分に引き立てている。

20. だんじゅ嘉利吉 …躍動感溢れる縁担ぎの歌…

昭和5 (1930) 年に作曲 (47歳)、作詞者は泉国夕照。この曲は、変ホ長調、33小節で歌詞は2番までである。拍子は、1～17小節まで4/4拍子、18～27小節まで2/4拍子、28小節のみ3/4拍子、29～33小節は2/4拍子に変化する混合拍子である。沖縄民謡「だんじゅかりゆし」の旋律をモチーフに使い、二重唱に作曲した。前半、17小節まではゆったりとしたテンポで歌い、18小節の《だんじゅかりゆし》から、速いテンポに変わる。沖縄では、めでたい時や、縁担ぎに歌われる。

21. 琉球木遣歌 …ヘンデルの「ハレルヤ」がヒント…

昭和5 (1930) 年に作曲 (47歳)、作詞者は新屋敷幸繁。曲は、ハ長調、30小節で歌詞は3番までである。拍子は、1～17小節まで4/4拍子、18小節は2/4拍子、19～30小節までは、再び4/4拍子に変化する。琉球民謡の「国頭サバクイ」が元歌で、長包は、混声四部合唱に作曲し、ピアノ伴奏を付けた。《ハイユエ、ハララ》、《サア、ハリガリヨイシ》、《サア、イヒヒヒーヒ》の囃子は、ヘンデルの「メサイア」の《ハレルヤ》をヒントに作ったという⁽²²⁾。

映画『えんどうの花』のシーンで、長包 (配役：池田卓) が、作曲に苦悩している場面があるが、ヘンデルの「メサイア」をBGMに使い、琉球木遣歌が“誕生”する情景を描写している。

長包の故郷、石垣市では、朝に、石垣市役所の宣伝カーが「琉球木遣歌」を流して巡回し、一日の始まりを元気に過ごそうというメッセージとして流れる。そして、夕方は、「えんどうの花」が、1日の疲れを癒し労うというメッセージとして、宣伝カーが巡回しているが、長包メロディーは、今日まで日常生活と呼応しているのである。

22. なんだ浜 …山田耕筰が「宮良音楽の白眉だ」と激賞…

【楽譜6】 (19~32小節目)

昭和5(1930)年に作曲(47歳)、作詞者は宮良高夫。与那国島祖内の北側にある、なんだ浜を描写した曲で、主旋律は、与那国島の代表的な民謡、「与那国シヨンカネー」がベースになっている。民謡の元歌をモチーフにした長包独特の作曲手法が鮮明に現れている長包メロディーの代表作の1つである。【楽譜6】

長包が薫陶を受けた作曲家・山田耕筰は、「宮良音楽の白眉だ」と激賞したという。曲は、最後のフレーズ30~31小節では、下のH音から上のE音まで一気に上行していき、曲のクライマックスを遂げ、最後の32小節で下行しながら、G#音で終止する。そのクライマックス部分は、民謡「与那国シヨンカネー」の後半部分と曲想が同じである。静

かな波打ち際と海上で波風を受けたうねりの情景を、音の強弱、高低、動静のコントラストで描写し、メロディックである。なんだ浜は、現在では詞に表現されている光景はなく、人工的な浜に様変わりし、歌碑がひっそりそりと、佇んでいるだけである。

23. 夜雨 …素朴さが心に染み入る…

昭和6(1931)年に作曲(48歳)、作詞者は大浜孫佑。この曲は、二短調、4/4拍子、12小節の短い曲で、歌詞が3番まである。タイを駆使し、しっとりしたイメージを生かしているが、複雑なリズムは使わず、8分音符、4分音符、付点2分音符で構成しており、素朴であるが心に染み入る曲である。

24. 迷い鳥 …母親の子守歌…

昭和6(1931)年に作曲(48歳)、作詞者は宮良高夫。曲は、へ短調、19小節で、拍子は1~3小節まで3/4拍子、4小節が2/4拍子、5小節は3/4拍子、6小節が2/4拍子、7~19小節

は3/4拍子で、1小節ごとに目まぐるしく変化する箇所も見られる混合拍子である。歌は3番まであり、ピアノ伴奏で作曲している。長包メロディーの愛唱家で石垣市在住の大山喜代子さん(79歳)は、「この歌を四男に子守歌で歌って聞かせると怖がって泣き出した。メロディーに淋しさや怖さを感じる響きがあるのかも知れない」と四男の幼い頃を回想した。11~12小節の左手のピアノ伴奏型は、「なんと浜」の前奏と後半部と同じシンコペーションのリズムを取り入れている。音使いがミステリアスな感もある。

25. 山の子守唄 …広い声域で擬声音…

【楽譜7】(23~30小節目)

23小節目

ほろろんんほろろんんこぼともーなきーまし
ぼっかりりぼっかりかしるーいんつきーばか

リズムモチーフ

たたり

16分音符と8分音符

昭和6(1931)年に作曲(48歳)、作詞者は宮良高司。宮良高司が、沖縄県小浜島の小浜尋常小学校(現・竹富町立小浜小中学校)に教員として赴任、その時に島の夕暮れ時の自然を詞に表わした。曲は、変イ長調、30小節で歌詞は3番までである。拍子は、1~2小節は3/4拍子、3小節は2/4拍子、4~18小節は3/4拍子、19小節は4/4拍子、20~30小節は、3/4拍子で終止するが、頻りに拍子が変わる混合拍子である。

長包は、伴奏部に16分音符と8分音符を使ってリズムモチーフを構成、23~24小節部分の、鳥を《ほろろん》、蛙を《とろん》、月を《ぼっかり》の擬声音は高いF音から下行するE^b音の広い音域で表現している。【楽譜7】

(2) 校歌

26. 読谷村立古堅小学校

昭和2(1927)年に作曲(44歳)、作詞者は松根星舟。曲は、ハ長調、4/4拍子で24小節で構成され、歌詞は2番までである。付点4分音符と8分音符の組み合わせを主体に、A A' A B B' B"の形式で構成している。古堅小学校の校歌作曲の依頼を受けた長包は完成させると、自作を携えて同校へ赴き、実際に校歌の歌唱指導を行なっている(『73周年記念誌』昭和50年、34頁)。作詞の松根星舟について調べたが、詳細はわかっていない。現在も歌われている校歌である。

27. うるま市立与勝中学校

作曲推定年は、昭和3(1928)年で(45歳)、作詞者は新屋敷幸繁。曲は、ハ長調、4/4拍子、13小節の曲で、歌詞は4番までである。校歌で良く使われる付点8分音符と16分音符のリズムの組み合わせが主体で、歌いやすく覚え易い曲である。第4音のF音と第7音のB音が使われていないヨナ抜き旋法で作曲されている。与勝中学校は、平成17(2005)年の市町村合併時に伴い、うるま市立に改組されている。市町村の合併によって校歌が新しく入れ替わる現今、

長包作曲の与勝中学校校歌は現在も同校で歌われ、健在である。

28. 沖縄県立第二中学校

昭和3(1928)年に作曲(45歳)、作詞は二中国語科教員となっている。曲は、ト長調、4/4拍子、10小節と短い曲構成で、歌詞は4番までである。リズムは、付点8分音符と16分音符の組み合わせで構成され、マーチ風である。歌詞は《楚辺》や《城岳》など、学校の位置を示す地名が描かれ、校歌の特徴が良く表れている⁽²³⁾。沖縄県立第二中学校とは、沖縄県立那覇高等学校の前身である。

29. 沖縄県立第三中学校

昭和3(1928)年に作曲(45歳)、作詞者は新屋敷幸繁。曲は、ロ長調、26小節で歌詞は3番までである。拍子は1~14小節までは2/4拍子、15~17小節は3/4拍子で、18~26小節は再び2/4拍子に戻る混合拍子で、マーチ風リズムを取り入れている。長包がロ長調で作曲した作品は、他に「桑の実」(平行調の嬰ト短調)に見られるだけである。沖縄県立第三中学校は、沖縄県立名護高等学校の前身であり、歌詞の《国頭》、《名護岳》、《嘉津宇岳》の地名は、沖縄本島北部に位置している。作詞者の新屋敷幸繁とのコンビでは、「夕立」、「琉球木遣歌」、「与勝中学校校歌」、「玉城尋常高等小学校校歌」がある。

30. 名護市立名護小学校

昭和4(1929)年に作曲(46歳)、作詞者は名嘉元精一。曲は、ト長調、2/4拍子、20小節で歌詞は、4番までである。付点8分音符と16分音符のリズムを主体にした行進曲風である。作詞者の名嘉元精一は、「沖縄県青年團歌」の作詞者である名嘉元浪村と同一人物で、浪村はペンネーム。長包は、校歌を発表した5月に名護小学校に招かれ、6年1組で(担任:柳一夫先生)、特別授業を行なっていることが、『百年誌』⁽²⁴⁾に記述されている。楽譜にコードネームが記されているが、長包自身の指示かどうか不明である。名護と関わりのある作品は、「沖縄県立第三中学校校歌」、「猷穀田(けんこくでん)田植歌」、「名護小唄」がある。沖縄県北部に位置する名護市に関わる作品を手掛けたということは、長包が音楽行脚で地方を巡回した際に、学校関係者と関わりを持つことで、校歌作曲の依頼を受けたのではないだろうか。また、「猷穀田田植歌」の作詞者、神田精輝とのコンビでは、「首里尋常高等小学校校歌」がある。

31. 具志川尋常高等小学校

推定作曲年は、昭和5(1930)年に作曲(47歳)、作詞者は古波蔵保昌である。曲は、変ホ長調、21小節で、歌詞は3番までである。拍子は、1~16小節まで2/4拍子、17小節のみ3/4拍子、18~21小節まで2/4拍子に変化する混合拍子である。古波蔵保昌とのコンビでは、「具志川小学校五十周年記念奉祝歌」がある。具志川に関連する曲では、「具志川小唄」があり、現在、旋律を調査中である。

32. 沖縄県師範学校附属小学校

昭和6(1931)年に作曲(48歳)、作詞者は福重猛治。曲は、ヘ長調、アウフタクトで始まる16小節で、4/4拍子の曲である。歌詞は、3番まであり、首里城下に位置する景観を、《首里

城下》、《中山》、《瑞泉》など歌詞に出てくる地名で表現されている。附属小学校は、教員を養成する沖縄県師範学校の附属小学校として、明治14（1881）年に開校されたが⁽²⁵⁾、長包は大正4（1915）年に、登野城尋常高等学校からこの附属小学校へ転勤となった。この時期を境に、長包の猛烈な作曲活動が始まったのである。

(3) 団体歌

33. 那覇市市民歌

昭和4（1929）年に作曲（46歳）、作詞者は安藤佳翠。曲は、ハ長調、16小節で、1～14小節は2/4拍子、15～16小節は4/4小節である。歌詞は3番まであり、後半の「わがなはし」の箇所を、意図的に4/4拍子に変化させ、《わ》と《が》をG音～E音の6度音程で跳躍を図り、曲を盛り上げていることがわかる。現在も、那覇市の式典や、地元ラジオで、那覇市広報番組でテーマ音楽として流れており、生活に密着した曲である。数年前、那覇市では、歌詞が時代にそぐわないとして、歌詞を見直す検討委員会の動きがあったが、一旦見送られ、原歌のまま現在でも歌われている。この作品については、拙稿、「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（1）一枚歌作品を中心に」⁽²⁶⁾で論述した。

34. 沖縄県青年團歌

昭和5（1930）年に作曲（47歳）、名嘉元浪村。この曲は、二長調、16小節で4/4拍子、歌詞は2番までである。この曲については、拙稿「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（3）—最新の発掘作品を中心に—」⁽²⁷⁾で詳述したが、もともと埋もれていた曲で、歌を記憶していた那覇市在住の安里康雄さん（85歳）が、「宮良長包の曲ではないか」と問い合わせてきたのが調査のきっかけであった。筆者は、安里さんの歌唱の採譜に取り掛かり、琉球新報紙面でもこの曲について読者に情報を呼びかけた。その結果、採譜曲は、『沖縄青年』に掲載されている曲と同じものではないかという情報があり、精査した結果、安里さんが歌唱した曲は、採譜曲と同一と判断し、長包作品と断定した。

『沖縄青年』（第1号、1930年発行）に掲載されている旋律は16小節で二長調であるが、筆者が採譜した曲は、10小節でト長調であり（調性は歌唱者の音域）、旋律はほぼ同じであった。歌詞は安里さんの記憶による歌唱では1番、2番が混在していたが、2番までである曲とわかった。

長包の発掘作品を継続研究している筆者であるが、これまで多くの方々によって、記憶を辿って歌唱する旋律を採譜する作業を行ってきた。人間が記憶して歌う歌は、長い年月を経てもほぼ正確であることがわかり、改めて確信することとなった。

尚、作曲年について、歴史研究家の仲村顕氏は、大正13—昭和3（1924—28）年として推定年の幅を持たせているが⁽²⁸⁾、筆者は、長包自身が作曲の年月日を明記していない以上、『沖縄青年』に刊行物として公にされた年月日を作曲年と判断し、1930（昭和5）年とした。

I-2. 旋律不明の作品

昭和前期の作品で旋律不明の曲は、「赤陽羅」、「秋の口笛」、「泣く子」、「感謝」、「雨乞いのうた」、「首里の城」の6曲である。「赤陽羅」⁽²⁹⁾と「首里の城」⁽³⁰⁾は旋律不明であるが、歌詞が判明しているので記述しておく。

「赤陽羅」 伊波南哲作詞

1. 琉球の島の赤い花 誰が植えてしぞ赤陽羅 3. 人皆寝ねし真夜中に 誰が歌するぞ赤陽羅
 輝く五月の陽の下に 島の若人の情映えて 海の人魚ぞ訪れて 今宵夜すがら歌唄う
 真紅に染まる赤陽羅 琉球の島の赤陽羅 神秘にひたる赤陽羅 琉球の島の赤い花
 真紅に染まる赤陽羅 神秘にひたる赤陽羅
2. 月美しき夏の夜は 天女ぞ降る赤陽羅
 夜目にも赤きこの花に 心逝くまで接吻し 註 右二篇は宮良長包氏に依って
 羽衣かけぬ赤陽羅 琉球の島の赤い花 作曲済
 羽衣かけぬ赤陽羅

「首里の城」 宮良高夫作詞

1. 春はやさしき城の夢 2. 稚児かける城のかげ 3. 白雲ふかき秋の空
 茂る木々の瞳青く燃え かける瞳に 城壁に 鳴く荒涼の 城跡に
 燃ゆる夢 夢 城壁の 映える南の 赤ゆらよ 若き夢見つ さすらへつ
 花うるはしく さかり良く 五月の空は 華やかに 消ゆる懐古の 思いたく
 昔むかしの 花に咲き 昔を偲ぶ 城の花 ああむらさきの首里の城

「首里の城」の詞が掲載されている、『宮良高夫』（宮良スミ編、自費出版、平成7年）の箇所、「雅楽調に民謡を織り込んだ頗る内容を一致した傑作とされている」と付記されている⁽³¹⁾。果たして、雅楽調と民謡を融合した曲とは、どんな曲だったのだろうか。旋律は、未だ不明である。

宮 良 長 包 作 品 表 IV
 (昭和前期篇)

【旋律不明の作品】

No	曲名	作曲・発表年(推定含む)	年齢	作詞者	備考
35	赤陽羅(あかやうら)※	昭和5 (1930) 年	47	伊波南哲	→※「赤陽羅」は歌詞あり。
36	秋の口笛	昭和5 (1930) 年	47	宮良高夫	あり。曲名、作詞者は
37	泣く子	昭和5 (1930) 年頃	47	不明	仲村調べ。仲村の作曲
38	感謝	昭和5 (1930) 年頃	47	不明	推定年に基づき、作曲
39	雨乞いの歌	昭和5 (1930) 年頃	47	不明	年を判断。
40	首里の城	昭和6 (1931) 年	48	宮良高夫	→※「首里の城」は歌詞あり。

II. 昭和前期作品の特徴

1. ピアノ伴奏譜の作曲が多くなる

昭和元(1927)年から昭和6(1930)年にかけて、わずか6年で40曲を作曲、もつとも充実した時期の作品である。明治、大正期の作品は、50曲あるが、楽譜不明も14曲と多く、また、習作風なものが多かった。しかし、昭和期の作品はピアノ伴奏譜が付いた作品が増え、「駅路」、「春小

雨」、「オランダ屋敷」、「船路」、「夕立」、「首里古城」、「帰り舟」、「日暮れ」、「琉球木遣歌」、「なんた浜」、「迷い鳥」、「山の子守唄」がある。その殆どの曲は、現在、演奏家がコンサートでプログラミングしたり、CDをリリースすることが多く、完成度の高い作品である。

2. 沖縄民謡や八重山民謡を元歌にした重唱曲が増える

沖縄民謡や八重山民謡を元歌にした手法は、大正期作品では、「嘆きの海」、「母恋し」、「綾雲」にも見られたが、昭和前期には、沖縄、八重山民謡をモチーフにした重唱曲が増えている。例えば、二重唱曲では、「だんじゅ嘉利吉」、「稲刈歌」、「猫ユンタ」、「コイナユンタ」、「鷺の鳥」、四重唱曲では、「琉球木遣歌」がある。

3. 単旋律の曲が少なくなる

明治、大正期には、26曲とかなり多く見られた単旋律の曲は、昭和前期には、極端に少なくなり、校歌、団体歌を除くと、「廣野の涯」、「夜雨」など7曲である。これは、長包の作品が一層充実してきたことを意味する。また、「汗水節」の楽譜には、歌唱の単旋律に三線用の五線譜が書かれ、2段譜になっている。

4. 校歌、団体歌の作品が多くなる

明治、大正期では校歌作品は2曲のみ（うち1曲は行進曲）であったが、昭和前期には7曲を作曲、全曲とも旋律が判明しており、そのうち、3曲は現在も歌われ、校歌として健在である。

また、明治、大正期には作曲していなかった団体歌については、「那覇市市民歌」、「沖縄縣青年團歌」の2曲を作曲しており、「那覇市市民歌」は現在でも歌われ、市民の生活に定着している。

5. 混合拍子の曲がより多くなる

昭和前期の混合拍子の曲は、声楽曲では、「春小雨」、「船路」、「夕立」、「首里古城」、「帰り舟」、「日暮れ」、「コイナユンタ」、「だんじゅ嘉利吉」、「琉球木遣歌」、「なんた浜」、「迷い鳥」、「山の子守唄」、「月夜の鷗」があり、急激に増えている。校歌、団体歌では、「具志川尋常高等小学校」、「沖縄県立第三中学校」、「那覇市市民歌」が混合拍子で、計16曲である。

明治、大正期の混合拍子の曲では、「子供会の歌」、「鳩間節」、「赤ゆらの花」、「泊り舟」、「南国の花」、「夜の響き」、「ふる里」、「母恋し」があり、校歌の2曲は混合拍子で作曲されていないので、計8曲である。作品数で判断すると、明治、大正期に比べて2倍の混合拍子の曲を作曲しており、なお一層、拍子が混在する手法を好んで使っていることがわかる。

以上をまとめて見ると、混合拍子と沖縄民謡や八重山民謡をモチーフにした作品はさらに増えており、長包が好んで作曲した技法として、その作風が強まったといえる。

反面、長包の処女作である「笛」のように、既成の詞に旋律をつける技法や、旋律モチーフを自作の複数曲に転用する技法は、昭和前期の作品には見当たらない。

作詞者については、作曲を始めた頃の作品は、長包自身の作詞が多く、習作のために作詞も創作した様子がわかるが、昭和前期は、師範学校の同僚や、国語教師とのコンビが多くなり、作詞を本職とする人達と共同創作をしている様子がわかる。

Ⅲ. 「明治・大正篇」の補記

先行論文、「宮良長包の音楽教育活動に関する研究(4)ー作品研究Ⅰ(明治・大正篇)ー」⁽³²⁾において、楽譜不明の「心の花」について、又、「鳩間節」をオペラ歌手の藤原義江が演奏したという立証について調査していたが、論文の発表直後に調査内容がある程度判明したので、本論文で補記する。

1. 心の花

「心の花」は大正13(1924)年の作品で⁽³³⁾、作詞者は近藤鐵太郎であるが、旋律不明であり、また、どのような歌詞であるか、全くわかっていない。そこで、旋律や歌詞を知る手掛かりとして、作詞者の近藤鐵太郎について調べることにした。

長包作曲、近藤鐵太郎作詞の「心の花」の曲名は、「竹柏会」が主催し、明治31(1898)年2月11日に創刊された詩集本、『心の花』(創刊時は『心の華』)と同じ名前であることがわかった。そこで、『心の華』を愛読し、竹柏会の会員だった近藤は、自ら創作した詩に、「心の花」と作品名をつけたのではないかという推測ができる。当時、沖縄県女子師範学校の国語教員だった近藤は、大正10(1921)年に、「女子師範学校・第一高等女学校寮歌」を作詞している。そのことから、沖縄師範学校教諭心得だった長包は、近藤と交友関係にあり、「心の花」の詞に作曲したのではないだろうか。

これらの手掛かりをもとに、詩集本、『心の花』について調べた結果、次のようなことがわかった。

- ①『心の花』は、明治31(1898)年に月刊詩集本として創刊、現在も発刊中である。
- ②近藤は『心の花』を発行している竹柏会に参加し、詩を発表している。
- ③近藤の発表した作品は、次の詩である。

こし文を開かぬ先にまづぞ思ふ花の志らせの花か非か⁽³⁴⁾

- ④その発表後、『心の花』に投稿した近藤の作品は見当たらない。

近藤が創作した宮良長包とのコンビ作品、「心の花」がどんな詞だったか、また、長包の旋律がどのようなものだったか、今回の調べで光は見えてきたように思うが、具体的に判明するまで引き続き調査が必要である。この事例のように、埋もれた長包メロディーが1曲でも、日に当るようにするには、地道な研究の継続が重要だろう。

2. 「鳩間節」と藤原義江

長包が作詞・作曲した「鳩間節」(1921=大正10)年は、作品の完成度からデビュー作ともいわれている。三木健著『宮良長包 沖縄音楽の先駆』(ニライ社、74頁)によると、「歌手の藤原義江がハワイで在布日本人のために音楽会を開いた際、この《鳩間節》を声高らかに歌い、満堂の聴衆を感動させ、アンコールにこたえて再びステージに立ったという」の記述があるが、藤原義江が歌った状況や、その背景について確証となる資料を調査した。

藤原義江(1898=明治31~1976=昭和51)年は、大正から昭和にかけて、国内外でオペラ歌手として活躍、“我等のテナー”と絶賛され、一世を風靡した人である。特に、日本歌曲を好んで歌い、山田耕筰のからたちの花は得意だったことが、当時の藤原の独唱会のプログラムか

ら読み取れる。いつ、どのようにして、藤原は「鳩間節」と出会ったのだろうか。藤原は、国内の地方演奏会にも積極的に出かけているが、沖縄に赴いた様子はない。

また、自身の演奏会でヨーロッパや米国を頻繁に訪れているが、ハワイ公演は、1924年（大正13）年、1926（昭和元）年、1928年（昭和3）年、1933（昭和8）年に赴いている。どの時期だったのか。関係出版物や音源、映像資料など調べたが、長包と藤原の接点が見えてこない。あの甘い声の藤原が、鳩間節をどのように表現して歌ったのか、大変興味深い。引き続き、具体的な成果が得られるよう、調査していきたい。

IV. おわりに

本論文は、先行の「作品研究Ⅰ（明治・大正篇）（沖縄県立芸術大学紀要第16号）」に続くものだが、作品ごとに解題することは、五線譜上に見えないたくさんの事柄を熟知していなければ、書けないことを実感した。というのも、戦火に埋もれた長包の貴重な作品の数々は、原楽譜や第1次史料が焼失していること、照合する資料がごく少ないなど、限られた資料を紐解いたり、長包に縁のある方々から聴き取り調査を行なうなど、地道な研究が基本であることを、改めて実感したのだった。長包研究の全容解明は遠い道のりであることも、また肝に銘じた研究でもあった。

このところ、「長包研究」が、歴史研究や国語研究、音楽史など、研究の裾野が広がってきており、本論文も、長包研究の推進力の一助となれば幸いである。

次の作品研究は、「昭和後期篇」を進める予定である。

【資料・情報提供／取材協力】（敬称略、順不同）仲村顕、大山喜代子、東京藝術大学附属図書館、早稲田大学中央図書館、沖縄県立図書館、石垣市立図書館、那覇市立図書館、国立国会図書館、日本現代音楽館、沖縄女子短期大学図書館、自費出版ライブラリー、琉球新報社出版部、沖縄キリスト教学院図書館

【注】

- (1) 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（4）—作品研究Ⅱ（明治・大正篇）—」（沖縄県立芸術大学紀要第16号、2008年3月）
- (2) 大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』（琉球新報社、2003年）
- (3) 『沖縄大百科事典 下巻』（沖縄タイムス社、1883年）、216、218頁
- (4) 三木健・大山伸子編著『宮良長包著作集—沖縄教育音楽論—』（ニライ社、2004年）、24～31頁
- (5) 同上、22～23頁
- (6) 宮良長包著『南島唱歌第一輯』（共益商社書店、昭和2年）
- (7) 大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』（琉球新報社、2003年）、42頁
- (8) (7) に同じ、36頁
- (9) (7) に同じ、53頁
- (10) (6) に同じ、3頁
- (11) 「生誕120年宮良長包コンサート」在沖石垣市郷友会主催、2003年6月、沖縄コンベンションセンター

- ⁽¹²⁾ 指揮・編曲／高宮城徹夫、演奏／沖縄交響楽団、ソプラノ独唱／坂名城律子
- ⁽¹³⁾ (4) に同じ、211頁
- ⁽¹⁴⁾ (4) に同じ
- ⁽¹⁵⁾ 沖縄マンドリンクラブ演奏「朝鮮の印象」
- ⁽¹⁶⁾ (2) に同じ、64頁
- ⁽¹⁷⁾ 指揮・編曲／高宮城徹夫、演奏／沖縄交響楽団
- ⁽¹⁸⁾ 『琉球賛美歌』(センブンスデー・アドベンチスト教団・沖縄地区、1991年)、98頁
- ⁽¹⁹⁾ いしがき児童合唱団。1981(昭和58)年、いしがき少年少女合唱団として結成、本拠地の石垣市を始め、沖縄本島、本土、海外でも演奏を行なう。宮良長包作品も得意な演目である。
- ⁽²⁰⁾ 宮良長包のドキュメンタリー&ドラマ『えんどうの花』(宮良長包映画製作推進委員会／シネマ沖縄、2006年3月から上映)
- ⁽²¹⁾ 女性合唱団、ミューズによる演奏
- ⁽²²⁾ (13) に同じ
- ⁽²³⁾ 浅見雅子・北村慎一『校歌一心の風景』(学友社、1996年)、3頁
- ⁽²⁴⁾ 名護市立名護小学校記念誌『百周年』名護市立名護小学校創立百周年記念事業期成会、昭和58年)、114頁
- ⁽²⁵⁾ 『沖縄大百科事典 上巻』(沖縄タイムス社、1883年)、480頁
- ⁽²⁶⁾ 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究(1) —「校歌」作品を中心に—」(沖縄県立芸術大学紀要第7号、平成11年)、89～112頁
- ⁽²⁷⁾ 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究(3) —最新の発掘作品を中心に—」(沖縄キリスト教短期大学紀要第35号、2007年)、43～57頁
- ⁽²⁸⁾ 仲村顕「宮良長包関係新資料紹介」(『沖縄文化』第41巻2号、2007年)、72頁
- ⁽²⁹⁾ 同上、79～80頁
- ⁽³⁰⁾ 宮良スミ編『宮良高夫』(自費出版、平成7年)、49～50頁、高夫、中学5年生(昭和6年6月に作詞)
- ⁽³¹⁾ (30) に同じ、50頁
- ⁽³²⁾ (1) に同じ
- ⁽³³⁾ 「沖縄タイムス」(1924年7月27日付)、(1) に同じ、「宮良長包作品表Ⅱ」
- ⁽³⁴⁾ 『心の花』第10巻第5号(竹柏会、明治39年5月1日発行)、98頁

【参考図書・文献】

1. 大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』(琉球新報社、2003年)
2. 三木健・大山伸子編著『宮良長包著作集—沖縄教育音楽論—』(ニライ社、2004年)
3. 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究(1) —校歌作品を中心に—」(沖縄県立芸術大学紀要第7号、1999年)、89～112頁
4. 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究(2) —発掘作品のパフォーマンス化—」(沖縄キリスト教短期大学紀要第35号、2007年)、27～42頁
5. 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究(3) —最新の発掘作品を中心に—」(沖縄キリスト教短期大学紀要第35号、2007年)、43～57頁
6. 宮良スミ編『宮良高夫』(自費出版、平成7年)、43～57頁

7. 岩崎卓爾著『岩崎卓爾一卷全集』(伝統と現代社、1974年)
8. 『岩崎卓爾一卷全集 索引』(沖縄県立図書館八重山分館、2003年)
9. 後藤暢子・團伊玖磨・遠山一行編『山田耕筰著作全集Ⅰ』(岩波書店 2001年・4月)
10. 後藤暢子・團伊玖磨・遠山一行編『山田耕筰著作全集Ⅱ』(岩波書店 2001年・6月)
11. 後藤暢子・團伊玖磨・遠山一行編『山田耕筰著作全集Ⅲ』(岩波書店 2001年・10月)
12. 佐々木すぐる著『改訂唱歌科教材集』(青い鳥楽会 1926)
13. 金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌 [上] 明治篇』(講談社文庫、1989年)
14. 金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌 [中] 大正・昭和篇』(講談社文庫、1989年)
15. 金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌 [下] 学生歌・軍歌・宗教歌篇』(講談社文庫、1990年)
16. 小長久子著『滝 廉太郎』(吉川弘文館、平成2年)
17. 『たのしいこどものうた600選』(自由現代社、1995年)、67、70、257頁
18. 藤原義江著『自画像 藤原義江』(春陽堂、昭和4年)
19. 『私の履歴書 文化人10』(日本経済新聞社、1984年)
20. 高田保著『二つの椅子』(朝日新聞、1950年)、25~45頁
21. 藤原義江著『流転75年 オペラと恋の半生』(日本図書センター、1998年)
22. 宮沢縦一編著『明治は生きている』(音楽之友社、昭和40年)、260~281頁
23. 藤原義江著『からたちの實』(改造社、昭和3年)
24. 藤原義江独唱会プログラム
25. LPレコード『藤原義江全集』(ビクター音楽産業(株)、昭和51年)
26. 『私の履歴書 第四集』(日本経済新聞社、昭和32年)、287~336頁
27. 『心の花』(竹柏会、明治31年2月《創刊号》~昭和14年5月号)

本論文の楽譜典拠

※大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』(琉球新報社、2003)

○印は宮良長包著『南島唱歌第一輯』(共益商社書店、昭和2年)

◇は沖縄県連合青年團編『沖縄青年』(第1号、1930年)

収録ページ

No.	曲名	楽譜	歌詞	No.	曲名	楽譜	歌詞
1	^{ばわいぬ とうる} 鷺の鳥	56-57	57	18	^{まや} 猫ユンタ	82-83	86
②	ちゅんちゅん雀	3	3	19	^{いねかりうた} 稲刈歌	84-85	87
③	月夜の鷗	4	4	20	^{かりゆし} だんじゅ嘉利吉	88	86
④	月	7	7	21	^{りゅうきゅう きやうた} 琉球 木遣歌	90-93	93
5	へちまの棚	129	129	22	なんた浜	94-95	89
⑤	旅心	9	9				
⑥	あきずすいすい	10	10	23	夜雨	96	96
7	^{うまやじ} 駅路	59-61	61	24	迷い鳥	97	96
8	春小雨	62-63	70	25	山の子守唄	98-99	89
9	オランダ屋敷	64-65	65	26	^{なご} 名護市立名護小学校校歌	138	138
10	^{しゅり こじょう} 首里古城	71-73	73	27	^{よみたん かるげん} 読谷村立古堅小学校校歌	139	139
11	^{ふなじ} 船路	66-67	67	28	^{よかつ} うるま市立与勝中学校校歌	140	140
12	夕立	68-69	69	29	沖縄県立第二中学校校歌	153	153
13	帰り舟	74-75	75	30	^{くしかわ} 具志川尋常高等学校校歌	154	154
14	日暮れ	77	80	32	沖縄県立第三中学校校歌	158	158
15	^{あしみじがし} 汗水節	76	80	31	沖縄師範学校附属小学校校歌	159	159
16	コイナユンタ	78-79	79	33	^{なほ} 那覇市市民歌	162	162
17	^{こうや はて(はたて)} 廣野の涯	81	81	◇34	沖縄県青年團歌	扉3	扉3